金達壽

小說全集

六

金達寿小説全集 六

筑摩書房

金達寿小説全集六
一九八〇年四月二十日第一刷発行

著者　金達寿
発行者　布川角左衛門
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町三―八
電話　（営業）二九一―七五五一（編集）二九四―七六一一
振替　東京六―四一三三
印刷所　三松堂
製本所　鈴木製本所
装幀者　田村義也

©一九八〇年　金達寿　〇三九六―七〇〇六―四二〇四

Printed in Japan

金達寿小説全集　第六巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六巻　目　次

朴達の裁判……5
玄海灘……69
解題……329
〈著者うしろがき〉わが文学と生活(一)その前史……337

朴達の裁判

南部朝鮮Kという町は、なかなかおもしろいところである。いまから百何年かまえ、かの六等官パーウェル・イワーノヴィチ・チーチコフがどこからともなく四輪馬車を乗りつけたロシアの県庁所在地もなかなかおもしろいところであったらしいが、この町もそれにおとらずおもしろい。

あいにくこの町は県庁、つまり道庁所在地ではないが、しかし人口は約三万のレッキとした市で、地方法院の支院もあれば、もちろん警察署、検察支庁もあり、それに刑務所もある。この点ではかのチーチコフが乗り込んだ県庁所在地とまったくおなじであるが、しかし、かのロシアとはほとんどの点でちがっている。

その第一は、まず、ここは現代の南朝鮮・大韓民国であって、決してかの農奴解放以前の暗いロシアなどではないということである。自由世界の番人といわれるアメリカ軍の基地があるという点でもちがっているが、それにまた、筆者は、かのウクライナ人ニコライ・ヴァシーリヴィチ・ゴーゴリが描いたところの『死せる魂』の主人公とおなじような男を、ふたたびここに登場させようというのではない。

だいいち、いまどきあんなチーチコフのような死んだ農奴を買い歩く男があるはずもないが、それにゴーゴリのその主人公は六等官の貴族であったけれども、われわれのこれは、朴達（パクタル）とよばれている一介の、実に一介の作男、すなわち農奴自身だった男にすぎないのである。そしてまた、かのチーチコフは四輪馬車などでどこからともなく乗りつけてきたが、われわれの彼は、いま、このK市の刑務所から釈放されてでてくるところなのである。

つまり、筆者は、ここからこのものがたりをはじめるのであるが、――それ、出てきた。わが朴達はいまK刑務所を、裏口から放りだされるようにして出てきた。

彼は、ふと、何か忘れ物をでもしたかのように立ち止り、目をほそめて、初夏の陽光のなかにしずまっている前方の町のたたずまいをながめている。

われわれの主人公は、どうして、いま刑務所から出てきたところにしてはそう痩せてもおらず、といって肥えているというわけでもないが、背は六尺はあろうと思われる大きな図体の、なかなかの男前である。

が、あとがあまりよろしくない。次のしゅんかん、彼は親指をかまえて顔のところへもっていったかとみると、ぴいーと音を立てて洟（はな）をかんだ。つづけて、こんどは中指をつかってもう一丁。

そして彼は、いまそこを出てきたばかりの黒いコンクリ

ート塀の刑務所をふりかえり、思わず、「えっへへ……」となるところを、「ふン！」とかんだばかりの鼻孔をうごめかして笑った。それはどういう意味なのか。これだけの動作をすると、彼は、みたところの大きな図体とは似合わぬ、案外にかろやかな足どりで、山腹にある刑務所を離れて町のなかへと入って行った。ふり向きもせず、この市の幹線道路をまっすぐに歩いて行く。

そう、あの幹線道路だ。だいたいこのK市というのは、その町のでき工合いからしてなかなかおもしろい。といって格別とびきりどうというわけではないが、町は、この市でのもっとも大きな建物である刑務所の正門から発している、一本の幹線道路を中心としてできている。

それは、ここにまず刑務所ができると、正門からすーと筆をのばして、えい、チョンとやり、あとは勝手にしろといったようなトの字型になっていて、間もなく右の駅へとカギ型に折れているところがあるが、その三叉路をあいだに、こちらが地方法院支院、検察支庁、警察署をはじめ、この市の国防軍をもそのレイ下に含むアメリカ軍司令部、憲兵隊、税務署、労務調達管理処、市庁などがかたまっている官衙街で、道路も、ここだけはアスファルトで舗装されている。

いうまでもないことながら、ここはむかし、その刑務所をもってやってきた日本人たちが住んでいたところで、俗に日本人町といわれていたところである。が、いまは、そこの官衙のアルジである大韓民国の役人や地主たち、それからそれ、あのアメリカ人たちがやってきて住んでいるのである。

この道路に付ずいした説明をもう少し、しなくてはならない。舗装道路を出はずれると、つまりトの字の半分向うは、こんどは、この地方特有の赤土がこなごなに踏みしだかれて、それがほこりとなって舞い上がるぼこぼこの往還である。両側は、これもまたその道路にふさわしく、藁ぶき家が低い軒びさしをならべてぎっしりとつまっている。しかもそこはいくぶん低地になっているので、右の官衙街からこれをみおろすと、まるい藁ぶき家がちょうどキノコを押しつめたようになってみえる。

いうまでもないことながら、これがこの市に集っている民家の聚落で、なかに点々とトタンぶきやその他の屋根がみえなくはないが、それはそれでまた、金融組合や妓生（芸者）組合、それから何事も耐え忍ぶこと、耐え忍ぶことこそ美徳なれと神のオボシメシを説く、あのアメリカ人の経営する教会であったりする。だいたいこの教会というヤツは、……いや、はなしが横へそれそうだ。

このぼこぼこの往還を、つまり市内を出はずれると、こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んどは郊外ということになるが、ところが妙なことに、どうしたことか人家のとぎれているそこからさきはまた、かなり立派なアスファルトの舗装道路となっている。農夫が、疾走してくる軍用トラックやジープなどにびくびくしながら、牛といっしょにはだしで歩いている。これでおわかりのことと思うが、ここからは山にかくれてみえないけれども、そのさきの方に、この国の番人であるアメリカ軍の基地・飛行場があるのだ。

さて、これでわれわれはこの町・市を一わたりみわたしたことになるが、われわれの主人公である朴達は、いまちょうど官衙街（この町のことを市の住民たちは実にウマイことばでよんでいるが、それはどうにも日本語では訳しようがない。ムリにでも訳せば、「エライ人ノ町」ということにでもなるであろうか）の舗装道路をとおり抜けて、例のトの字の三叉路にさしかかったところである。

すると朴達は何を思ったのか、そこの舗装道路のキレ目のところまでくると、またふいと立ち止った。彼は、いまとおり抜けてきたうしろの官衙街をふりかえり、こんどは手洟はかまなかったが、もう一度、「ふン！」と鼻を鳴らして笑った。よく、妙な笑い方をする男であるが、こんどは、いくぶんにやりといった気味であった。

そこで彼は、やっとぼこぼこの往還へ足を踏み入れたわけであるが、その往還をもアメリカ兵を乗せたジープなどが、ひっきりなしにほこりを巻き上げて疾走している。そういうほこりのなかから立ちあらわれるようにして、向うから肥桶をつんだ牛車がのろのろとやってくる。買出しの荷物を頭にのせて、背なかにぶらさがっている子供をゆすり上げ、ゆすり上げするおかみさんが——。

かとみると、中世紀的な長いキセルをくわえ、何がなんでもそのキセルだけは守り抜こうとするかのように、それをさも大切そうにつかんでおよび腰で道路を横ぎる老爺。それらのあいだをうまくすり抜けるようにして、朴達は身がるに、大股で歩いて行く。小脇に、小さなうすぎたないふろしき包みを一つかかえているが、それは、彼が昨年の冬、警察へ挙げられたときにつけていた上衣か何かだろう。

彼はいったいどこへ行くのか、たちまちその辺の露路へ姿を消したかとみると、どこかへ行ってしまった。われわれはここでしばらく待たなければならない。だいいち、彼はおそろしく早足である。ついて行ききれないのだ。それに、彼は必ずまた、この町のなかへ出てくるにちがいない。

そのとおり、夜になって、朴達はそのぼこぼこの往還とならびの、とある飲み屋の前へのっそりと姿をあらわした。小脇のふろしき包みがいまだにあるところをみると、彼は

まだ、自分の住居へはかえらなかったものらしい。
飲み屋といってもそんな看板一つさがっているわけではないが、なかでは犬汁を炊いているらしく、香ばしいにおいが鼻をついてきた。どうも、現代の文明人として、あいかわらずこの犬を食っているというのはあまり感心したことではないが、しかし、だからといって、筆者は自分の故国の名誉をおもんばかるのあまり、ここでウソをかくわけにはゆかない。しかも、わが朴達がまた、この犬汁が大好物ときているのだ。
彼はいままでまわってきたさきざきでも、何かともう大分ごちそうになっていたが、それでもなお鼻孔をびくびくさせながら、そこのがたびししてよく開かない扉を、まるで蹴とばすようにして開けて入ってきた。
「おう！」
「よう、朴達じゃないか！」
「おい、朴達！　お前まだ、――よくも生きてもどれたなあ」
などという声が、なかからいっせいにかかってきた。どれも、よごれっぱなしの顔に目だけぎらぎら光らした連中が濁酒をかたわらにして、犬汁のどんぶりのなかに首を突っ込んでいた。その彼らが、入口に立った朴達をふりかえったのである。
だが、朴達はそれらの声がきこえたのかきこえなかったのか、そんなふうに、しばらくのあいだにこにこ笑いながらそこに立っていた。席をずらしてくれたものがあって、そこへ行ってかけた。そしてなおもにこにこしながら、左右の連中をかえりみた。前のわたし板の卓のうえにおかれている犬汁のどんぶりなどみて、どうだ、うまいか、うまそうだなあ、というふうに――。
連中はどれもアメリカ軍基地の労務者たちで、彼らは朴達をとり囲むようにしてまださっきとおなじようなタン声をくりかえしていたが、その声をききつけたらしく、奥の方から白い歯なみを光らした若い女が一人、すいとそこへ出てきた。彼女はそこに朴達をみとめると、またすいとなかへ引っ込んで行った。そこで釜炊き女をしている朴達の妻（といっていいだろう）丹仙である。
やがて彼女は、生豆腐を一丁皿にもってでてくると、それをまたスイと朴達の前へさしだしておいた。別に表情をうごかすでもなく、黒い目と白い歯なみだけを光らして、笑って立っている。朴達は豆腐の皿から顔を上げて彼女をみると、これまた、にっと笑っただけだった。まるできのうもきょうも、いつも会っているといったような顔だ。そのくせ彼らは、半年以上も会ってはいないのだ。
「おう、さすがに丹仙はよく気がついてくれたなあ。その

豆腐を食ったら、こんどはこれを食いな。したら、また元どおりだ」
と、横の趙石愚爺さんが自分の食おうとしていた犬汁のどんぶりを、朴達の前へおしてよこした。
「朴達、お前、これも食っておきな」
するとあっちからもこっちからも、またどんぶりをおしてよこした。なかには、半分食いかけたものもある。
「おい、そんなことしてないで、あたらしく一つとってやったらどうだ。みんなでだしたらいくらにもならねえ」
と、これはイントリの李正柱だ。
「おいおい、おれがいくら犬汁好きでも、一度にそんなに食えるもんか。それにおれは何も、お前さんたちのように食うことに困っていたわけじゃねえからな！」
朴達がいった。しかし彼は、身体のはずむようなうれしそうな声であった。
「そりゃそうだろうよ！　いつも本家ぐらしのお前には、そんな心配があってたまるもんか。その点じゃ、お前もあのオイボレ爺さんなみだ」
どっと笑い声がおこった。もう食いおわってかえりかけたものたちも、朴達がそこへ入ってきたことで、そのままま腰をおちつけていた。もちろんなかには、彼を知らないものもいる。が、彼らも、何をしている奴かは知らんが、おもしろそうな奴だなアと思ってみている。
朴達はにやにや笑いながら、まず、丹仙のもってきてくれた生豆腐の方から食いはじめた。むかしから、警察での拘留や刑務所からかえってきたものにこうして生豆腐を食わせるのは、そうすると、ふたたびもうそこへはもどらないといういいつたえがあるからである。
どういうところからそんないいつたえができたかは知らないが、それ以来、この国ではいったい何万、何十万のものがこうしてその豆腐を食ってきたことであろう。いま、わが朴達もそれを食っている。しかし、朴達にとってのキキメはもうとうに証明ずみであるが、いままた、彼はそれを食っている。
「ところで朴達、こんどはお前また、どんな人たちに会ってきた？　また、まえのような騒動をおこすつもりかい」
横の趙爺さんが、朴達の食っている口もとをみつめていった。しみじみとした、年寄りらしい口調だ。
「どんな人って、いろんな人に会いましたさ。誰も騒動などおこすといってやしないが、しかし、おこしちゃいけないんですかい」
朴達は山椒のきいている犬汁をすすりながら、何事もないふうにいった。別に、そのために痩せたというようすはないが、陽にあたらないために白くなっている顔はたちま

ち生気をとりもどし、額からは汗をながしている。
「そりゃ、誰もいけないとはいいやしないさ。それはお前の勝手だよ」
と、うしろの方から、この仲間ではインテリといわれている李正柱が引きとっていった。彼がインテリ、すなわち彼らの仲間ではインテリといわれているのは、このなかでは珍しく彼だけが農学校を出ているからであったが、彼もかつては労働組合のことでつかまったことがある。三十くらい、朴達とおなじ年だ。
「それよりもおっさんのきいているのは、そのいろんな人たちというのがどんな人かっていっているんだよ。お前もこんどの刑務所じゃちょっと長かったから、また、大分いろんなことを教わってきただろうよ」
「おれはまだ、——その刑務所の本当のところまではいかなかった」と朴達は、みんなの注視しているなかで、どんぶりにのこったさいごの汁を飲みほしながらいった。「おれのいままでいたのは、こんども未決監というところだった。それで執行猶予というのだが、まだ、まあ、学校でいえば、やっと中学の一年生くらいというところだな」
「ちえっ、学校とまちがえていやがる。あいかわらずだな、お前は。はっはは……」
「そうさ、学校さ。いまもむかしも、この国じゃ人間らしい人間は、みんなあんなかにしかいやしないんだからな。それにおれたちのいける学校というのは……」
「おい、もうわかったよ、お前のそのはなしは。それにしてもお前という男は、いつも運のいい奴だな。こんどこそは十年も懲役へおくられるか、それともどうにかされちまいやしないかと思ったが、よくもまた、未決だけでかえされたもんだ」
李正柱は、大ゲサに嘆息するようにしていった。しかし彼としても、朴達がそうしてかえってきたことがうれしくないわけではない。それを、そういう嘆息のかたちであらわしたのだ。
「それは、運なんていうもんじゃないさ」
とまた、朴達はこともなげにいった。
「じゃア何だい。それじゃ奴らが、お前だけは特別扱いをしているとでもいうのかい？」
「そんなことはないさ。そんなありもしなかったことが、あるはずねえじゃないか。しかし、そういうふうにさせることはできる。そいつはこっちのやることで、奴らだってこっちという、相手があってのことだからな」
「それは、どういうことだ？」
李正柱は自分がみんなを代表して彼と話しているという意識もあって、うしろから体をのりだした。が、朴達は別

にそれをふりかえるでもなく、ひとりごとのようにいった。
「どういうことでもないさ。まえにもいったことだが、それはかんたんにいえば、お前とおれとはちがうということよ。どっちかというと、お前さんはエライのさ。だからお前さんは、いつまでたっても奴らに勝つことはできないんだ。自分というもんを、大事にしすぎるのさ。が、おれはそうじゃないんだ。そういうおれにとっちゃ、警察から検察、裁判所とまわっていくうちには、どっかできっと手ごたえのある奴にぶつかるもんだよ」
「例の転向、もう決して、決してしませんという拝みの手か」
「ふン！　そうよ。拝んで欲しい奴には拝みもするさ。それだからどうだというんだ。おれの頭は、やっぱりおれの首の上にくっついているじゃねえか。——
まあ、いいや。それはお前さんたちとは関係のないこった。それで、外のお前さんたちはどうなんだい？　毎日、たのしいかい」
朴達は、どうしたのか、急に怒りにかられたようにして、あたりの彼らをずらりと見わたした。彼らは、うす暗い制限電灯の明りに目だけぎょろつかせて朴達をみかえしていたが、そのどの顔をみても、おれは満足だ、たのしいといえるようなものは一人だっていやしない。

そのはずだ。何しろ彼らは一月「舌が抜けるほど働いても」それで白米一斗が買えるわけではない。もともと彼らは白米など食おうとは思わないので（食えやしないから）それはいくら高くなってもかまわないが、それといっしょに雑コクも高くなるから仕方がない。
だいたい、わが朝鮮の民衆たちのつかう形容詞にも白髪三千丈といった式のものがあって、この「舌が抜けるほど働いても」白米一斗が買えるわけではない、ということばもいささかそれに近い感がなくはない。しかし、実さいはさにあらず、これだけはむしろその逆なのである。
というのは、ここではいま白米一斗が四千何百圜（ファン）しているが、それにたいして、この国のレッキとした旦那（ナアリ）であるお巡りさんの給料は三千圜あまりである。——それからこの韓国でもあまりみなれなかった圜という札の文字であるが、これは、こんどの通貨改革のときにそれをアメリカで印刷したので、圓という字をうっかりしてこういうふうにまちがえたものだといわれている。何ぼなんでもと、ちょっと眉にツバをつけたくなるが、しかしこの町の人々は固くそう信じている。
それはともかく、これでは、その旦那方のお巡りさんたちはどういうふうにして食っているのだろう、とまず、その方が心配になるようなものであるが、そこはそれ、いま

この国で流行していることばにしたがえば、「サバサバ」である。そのサバサバによって食っている。だからこのサバサバのきかない、きくはずもない彼ら労働者たちはいくら「舌が抜けるほど働い」たところで、事実として、とうていその白米一斗を買えるはずがない。そんな舌の一つや二つ抜けたところで、いまは新聞ダネにもなりはしない。この「舌が抜けるほど働いても」ということばは、いつのことかは知らないが、むかしさいしょにいわれたときには、白髪三千丈とまではゆかなくとも、白髪一、二丈くらいの誇張はともなっていたであろうが、しかしいまでは、まったく、そんな誇張どころのさわぎではなくなってしまったのである。

そのしょうこには、人々は、いまではこんなことばはあまりつかわない。ダ性でまだそういっているものもあるが、では、そのかわりどういうことばをつかっているかというと、それは、「ああ——」という嘆息である。ただ、彼らは空きっ腹をかかえて、「ああ——」という。人に会っても、「舌が抜けるほど働いても」などというそんなムナムナしいグチのこぼし方などは、いまはしない。「ああ——」といえば、それで全部つうじるのである。

「くらし向きはどうですか?」「ああ——」と弱々しい目つきで相手をみかえすか、それとも空をでも仰ぐかすれば、それでもういいのである。すると相手も、「ああ——」という。さっき筆者はこの人々が犬を食うことについて、若干、意見めいたことをのべたが、しかし、その彼らにとって栄養のある食べ物といえば、それは十日に一ぺんくらいこうしてありつく犬汁くらいのものである。だが、これも決して安くはない。

ことに、こんどの戦争があってからというものは、何もかもがめちゃめちゃになってしまった。ふえるのは、軍隊と税金ばかりである。この町にも、むかしはちょっとした肥料工場や紡績工場なんかもあったものだが、それもいまは国防軍の兵舎になってしまっている。そこで、年々近郊の農村からあふれ出てくる彼らの働けるところといえば、この兵舎に入って兵隊になる以外は、アメリカ軍基地のレバーと称する雑役くらいのものである。ところがまた、それがいったいどこからどういうふうに計算されて出てくるのか、きくところの日本とくらべても、ひどい低賃金である。インフレの昂進が早いので、あるときには、働いても働かなくともおなじようなことさえある。

「ふん! たのしいことなんか、あるはずねえじゃねえか。ごらんのとおりだ」

と、なかの一人が朴達の口調をまねて、投げだすようにしていった。朴達とははす向いに坐っている二十七、八の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com